



Title	献辞
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2002, 17, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/19401
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

献 辞

『内陸アジア言語の研究』の第1号が公刊されたのは1983年であったから、今年でちょうど満20年を経たことになる。この記念すべき年に、本誌を生み出し、今まで継続・発展する礎を築かれた庄垣内正弘先生は、還暦を迎えることになった。現在編集の責任を負っている我々は、本誌の今年度号を先生の還暦をお祝いする記念号とすることにして、2年ほど前から準備を始めた。先生が親しくしておられる研究者や、先生から指導を受けたかつての学生は非常に多いので、そのような方々全員に原稿を依頼すれば大部な論文集となり、本誌のような雑誌の一號ではとうてい掲載できないことは明らかであった。それ故、庄垣内先生とごく親しく、さらに専門の分野も近い研究者に限って、寄稿をお願いすることにした。そうしてできたのが本誌17号である。実際にはもっと多くの寄稿希望者がおられたが、諸般の事情で今回の9人になった。それでも本誌としては空前のボリュームで全246頁となった。

庄垣内先生の学問研究に関しては、先生ご自身に準備していただいた業績目録が最も雄弁に語っていると思われるが、ここではいくつかの特筆すべき点を紹介しておきたい。先生は1942年4月17日に広島県呉市で生まれられた。1968年に大阪外国语大学モンゴル学科を卒業、同年4月、京都大学大学院(言語学専攻)に進学された。博士課程を経て京都大学の助手に就任されたのは1974年であった。1980年には神戸市外国语大学に助教授として赴任、1984年に教授に昇進された。ちょうどその頃、同僚の教授であった長田夏樹先生とともに本誌を創刊されたのであった。その後、1996年に京都大学大学院文学研究科の教授として転出され、現在に至っている。

先生の処女論文は頭韻四行詩で翻訳されたモンゴル語の『パンチャタントラ』に関するものだが、これは既に学部在学中に発表されていた。大学院に進学されてからはチュルク系の言語、とりわけ古代ウイグル語の研究を精力的に進めて来られた。特に古典モンゴル語の研究で培われた素養が活きるモンゴル期の、草書体の文字で書かれた仏教文献の研究では、世界でも右に出る者がいない第一人者であることは誰しもが認めるであろう。最も顕著な業績は『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』(I~III)京都 1991~1993で、全7000行以上に及ぶ文献を解読され、詳細な注を施された。この文献の漢文原典は

失われており、仏教学的にも貴重な資料として夙に有名であったが、あまりに難解なために部分訳しか提出されていなかったという代物である。仏教文献に関する文献学的研究はこれ以外にも非常に多く、先生の研究の根幹となっている。この分野での研究で特にユニークなのは、古代ウイグル語に対する言語学的研究である。梵語などインド語に由来する借用語の大半がトカラ語経由でウイグル語に導入されていることを明らかにした1978年の論文を皮切りに、いくつも論考を世に送られた。最近ではウイグル語のなかの漢語の要素に関する一連の研究が傑出しておらず、今回の記念論文集に寄稿された論文でも引用されている。ちなみに本号に寄稿することを快諾された諸研究者は、ウイグル語文献学の第一線で活躍する方々で、先生とは学問の世界での同僚であるだけでなく、互いに切磋琢磨されている良きライバルでもある。

先生はウイグル語文献以外にも、近世のいわゆる新ウイグル語についても重要な貢献をしておられることを忘れてはならないだろう。本誌の第1号に掲載された「畏兀兒館訛語」の研究—明代ウイグル口語の再構—はその代表的な例で、前後していくつかの論文を公表された。1979年に発表された「『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」では、満州文字表記の特異なウイグル語が、実はごく普通のウイグル語に過ぎないこと、しかしながら編集当時のウイグル口語の発音を精確に表記した非常に貴重な資料であることを明らかにされた。これは言語学の教科書にも登場しそうなほどあざやかな研究であったが、上で言及したインド語に由来する借用語についての研究とほとんど同時に発表されていた。これら以外にも現代のチュルク系の言語、アジアにおける言語接触の問題など、先生の興味と研究の範囲は実に広く、ここですべてに言及することができない。しかし、先生の首尾範囲を受け継いだ多くの若い研究者を輩出されたことは特筆すべき「業績」に数えられるべきであろう。本号では最初期に指導を受けた藤代女史が、最近の研究の一端を披露して下さった。

以上、庄垣内先生の業績を簡単に紹介して、庄垣内先生に対する献辞に代えることにしたい。先生のお人柄などについてふれることはなかったが、それは別の機会に弟子筋にあたる方々におまかせするのが適切であろう。

吉田 豊